

彙報

ないと確信する。然し眞の教會は別な證據を持つ。即ち神の教戒への服従とよくしつらへられた學識禮の證據である。」(ibid., p. 48, *Epître du Roi de France*) からも充分うかがはれるやうに決して無教會主義を説いたのではなく、此の點は更に、「特に夫人よ、神の子がその血によつて奉獻せる如き教會の地位を變じようなど考へてはならない。何故なれば之は凡ての膝がその前で屈する如きもの故」と説いてゐる處からも明瞭である。(ibid., p. 428, *Lettre à la Duchesse de Ferrare*) 即ちホルも説いてゐる如く彼はカトリックでは祖傳のまゝに打委かされた目に見える教會と神の國を區別し、前者を神の國へ織込まれる手段として絶對必要視した。彼は此の意味に於て確信式 (*Konfirmation*) を作出したと見てよゝ (Holl, *Luther und Calvin*, S. 18) 要するにカルヴァンはダヴィドの説いた處を信奉して神の殿堂を以て信者と共に純粹に神を敬ひ信を告白し、祈り、聖餐禮に加はる自由と解し、かゝる自由の果される場所として教會を意味付けたのであり、それが教會の自主獨立を重んじ、監督制度を拒み、國家の干渉を排斥する牧師選舉制度として具體化したのである。

倫理學研究會

五月七日 午後一時 於 第二演習室
キエルケゴールに於ける實存の問題

山村直資、氏

寄贈圖書

植田清次著 プラダグマティズム

東京白揚社

定價 三百圓

前 號 目 次

カントに於ける倫理と宗教の關係に就て(完)	文學博士 島 芳 夫
危機神學の生成とその展開 — 迎世前朝フランス精神史論 —	文學士 樋 元 和 一
宗教改革期ドイツの大學 — 「大學の理念」の史的展開(四) —	文學士 森 昭